豊かなコミュニケーション活動を実現する Output の創造

―地域外国語活動補助教材「Joy! Joy! English!」を活用した外国語活動の試み― 共同研究

代表者：北海道／旭川市立北光小学校　教諭　小山 俊英

概要 児童にコミュニケーション能力の素地が求められている外国語活動。

筆者は一人一人の児童に，素地にとどまらず，コミュニケーション能力を無理なく高めていくことをめざし，実践を行っている。

本研究では，次の２点を実践した。

① 単元を通して活動意欲の持続を促すために，Output もしくは Output 的な活動の充実を図る実践

② 地域教材「Joy! Joy! English!」を制作し，Output 的な活動で活用し，コミュニケーション能力を育む実践

筆者が平成15年に設立した AEEN の会員にも実践協力してもらい，児童の自己評価（活動評価）の分析をすることを通して，上記２点の検証にアプローチした。

現在使用している「英語ノート」では，Output もしくは Output 的な活動を仕組むことはなかなか難しい。しかしながら，充実した Output は，児童の活動意欲を持続させること，および，本研究で多くの児童に試用してもらった「Joy! Joy! English!」が，コミュニカティブで児童が意欲的に取り組むことのできる教材であることを検証することができた。

1 はじめに

平成23年度より小学校において外国語活動が完全実施される。実施にあたり，各学校には移行期間に引き続き英語ノートの他，指導書や英語ノートデジタル版などの教材が配布される予定である。それらを活用し，児童に「コミュニケーション能力の素地」を育むことが求められている。

「素地を育む」という観点で児童の姿や活動を見取る必要が出てきたことにより，児童が意欲的に取り組む外国語活動をどのように構成し，指導に結びつけていくのかが喫緊の課題として立ちはだかっている。

筆者は，これまで約10年間にわたる外国語（英語）活動の実践をもとに，Output もしくは Output 的な活動に着目し，児童の活動意欲を持続させ，さらに高めていく指導の一方策を提案していくこととする。

1.1 研究の経過と研究の動機

1.1.1 研究の経過

筆者は平成13年，北海道教育委員会より H/TEP（Hokkaido Teachers English Project）事業の一環としてカナダ・アルバータ州立大学に派遣された。その目的は，ESL の指導方法である B-SLIM（Bilash's Success-guided Language Instructional Model）を学び，帰国後，小学校英語活動の指導に生かすことである。

派遣後，前勤務校（旭川市立日章小学校）では，校内研修体制・研究内容を再構築し，翌年より B-SLIM を導入した英語活動を研究領域に据え，校内研究を推進した。

また，平成19年には現勤務校に転勤し，前任校同様，B-SLIM を核にした外国語活動を研究領域とし共同実践研究を推進した。

そのような中で，前任校は文部科学省より，平成19年度から２年間，「小学校英語活動等国際理解活

動推進事業」拠点校に，また，現勤務校は平成21年度「外国語活動における教材の効果的な活用及び評価の在り方等に関する実践研究事業」実践校に指定され，外国語活動研究において旭川市のみならず上川管内を牽引する役割を担った。

一方，筆者は，B-SLIM の普及をめざし，平成15年に AEEN（Asahikawa English Education Network）を設立し，8 年間の活動で，60回を超えるワークショップや授業研究会，講演会などを開催し，延べ2000人以上の参加者を得た。

本研究においては，AEEN 会員の方々に協力を依頼し，地域教材の制作支援や実践を提供していただくことになっている。

1.1.2　研究の動機

従来行われてきた英語活動と新設の外国語活動では，「ねらい」や「目標」の違いもあることから両者を単純に比較はできないものの，筆者は平成19年以降漠然とした「違和感」を抱えながら外国語活動の実践にあたってきた。その「違和感」がどこに起因しているのか，さまざまな角度からアプローチしながら手探りの実践を続けた。

約10年間，児童に対して行った「振り返りカード」（自己評価シート）の中に手がかりを求め分析してみたところ，本研究の仮説とも言うべき以下の 2 点を見いだすことができた。

(1) 高学年の児童にとって，単元の終わりに位置づけられている活動（Output もしくは Output 的な活動）に対する期待感が，そこに至るまでの活動意欲の持続につながっているのではないか。
(2) コミュニカティブな Output を通して，「言えた。伝えることができた」という達成感や喜び，満足感などが児童の動機づけとなり，活動意欲の高まりにつながっているのではないか。

【H17～22　単元終了時の自己評価シート：25回分，対象者＝日章小学校・北光小学校 5・6 年児童】

外国語活動の目標には，「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り…コミュニケーション能力の素地を養う」と示されている。この文言からは，必ずしも筆者が従来行ってきたような Output もしくは Output 的な活動は求められてはいない。慣れ親しむという活動で事足りるのである。ただ，知的な活動も求め始める高学年の児童にとって，慣れ親しむ活動だけでは，活動意欲の持続や高まりを期待できないと筆者は考えている。

平成19～20年度，単元を終えた後に，教師自身の Reflection（授業評価）を行い，さらに「振り返りカード」で児童の評価や感想に目を通した。そのたびに，「この活動でよかったのか」，「他に活動を充実させる方策はなかったのだろうか」という思いを持ち続けた。児童の自己評価における「達成感・満足感」と「活動への関心・活動意欲」が従来に比べて低い割合が続いたからである。これが筆者の「違和感」の源であり，本研究の動機となった。

1.2　研究構想

まず，平成13年度から 7 年間の英語活動の実践から，児童の「満足感・達成感」や「活動への関心・活動意欲」が比較的高かった単元や活動を洗い出してみた。5・6 年生の児童の自己評価を抽出して分析【単純比較＝自己評価は 4 段階評価で行い，観点ごとに A，B（A＝強くそう思う　B＝そう思う）合わせて95％を目安に20単元を抽出】してみたところ，次の 2 点が明らかになった。

(1) 外国人や外部講師などを招いた交流活動のように，直接体験をしたときや自分の使った英語が相手に伝わったときに，児童の満足感や達成感が高いという結果が示されている。
(2) 児童にとって身近な環境（人・物・場所など）を用いた活動をしたときには，児童の関心や活動意欲が高いという結果が示されている。

平成19～20年度，5・6 学年を担任し，5 年時は B-SLIM を中心に自作教材を使用し（英語ノートは 3 割程度使用），6 年時にはほぼ毎回英語ノートを使用し，B-SLIM による活動を進めた。

英語ノートを 3 年間使用してみたとき，言語材料（語彙や文型）の量やその配列について，支障となる要素は少なく，年間35時間を構成する素材としては，十分であると考えている。

ただ，単元の終末段階での活動が，英語ノートを

用いた活動や英語ノートの巻末にあるカードを使っての模擬体験活動（Bingo や Interview game）など，これまで実践してきた Output に比べ，ダイナミックさに欠けることは否めない。B-SLIM で言う Intake の Using it ステージなのである。

文部科学省は，外国語活動を行う際に，必ずしも英語ノートを使う必要はないという見解である。しかし，勤務校や地域内の多くの学校では，英語ノートを使用し，英語ノートに基づいた年間指導計画を作成し使用している現状にあり，「使わざるを得ない環境」の中にあった。

その中で，英語ノートをある程度使用しながら，コミュニケーション活動の素地を育むことにとどまらず，あえて「豊かなコミュニケーション活動」の実現をめざした。そのために，各単元の最後に Output 的な活動を位置づけ，実践を行うこととした。

2 研究の目的および研究の方法

本研究の最終的な目的は，外国語活動を通して豊かなコミュニケーション活動を実現することである。具体的には，児童個々の活動意欲を持続させ，Positive Attitude を育み，活動後に伝え合うことの楽しさや達成感，満足感などを感じさせることを目標として位置づけている。

以下 2 点の本研究に関する内容については，日常の授業を中心に据え，検証していくという方策をとった。

(1) コミュニケーション活動の在り方
～ Output を充実させることが学習者のモチベーションを高め，活動意欲を持続させる
【自己評価抽出分析(1)をもとに】
(2)「英語ノート」の効果的な活用の在り方
～ 地域外国語補助教材「Joy! Joy! English!」の使用が豊かなコミュニケーション活動を実現する
【自己評価抽出分析(2)をもとに】

研究計画については，図 1（p.56）のとおりである。

2.1 B-SLIM の導入— B-SLIM で求める Output の姿

B-SLIM では，活動の終末に行われる Output を重視している。また，B-SLIM では，Output の要素を以下のように明確に示している。

(1) Personal	— 自分が，直接に，英語でアプローチする
(2) Creative	— 表現や考えを自分で生み出す
(3) Integrated	— 学んだ語彙や文，表現などを統合して表す
(4) Spontaneous	— 自分で行おうとする自発的なものであること

筆者は，言語を取り扱う活動において，とりわけ母国語以外の指導にあたっては，この Output の場におけるコミュニケーション体験が，次の活動への Motivation を形成したり，言語運用能力を高めたりするものであると考えている。「コミュニケーション能力の素地の育成」という観点で考えたときに，Output の場を経験しない活動では，Activity などの楽しさや新しい表現に触れたことによる満足感という側面の素地しか形成できないと考えている。

2.2 これまでの実践（Output を中心に）

これまでの勤務校では Output の場を可能な限り英語（外国語）活動の終わりの段階に位置づけて実践してきた。「最後に行う Output の際に必要な語彙や表現を学び，活動を Small Step で展開させていく」（活動のストーリー化）という見通しを持たせ，Output への期待感を持続させながら活動に取り組むことができるように内容を構成した。Output を意図的に組み立てることにより，活動に向かう児童の意欲や態度を高め，児童のコミュニケーション能力を高めていくことも視野に入れ，実践に取り組んだ。

実践を通して Output の段階で英語を使って交流することができたり，使用した英語が認められたり（賞賛されたり）したときに，児童は一連の取り組みに自信を持ち，もう一段ステップアップした意欲で次の活動に向かうことを，児童の自己評価などで確認することができた。

PLAN

① 豊かなコミュニケーション活動を伴う Output を行うことで，児童は意欲的に外国語活動に取り組む
② コミュニカティブな Output を実現するために，地域外国語活動補助教材「Joy! Joy! English!」を活用する

PREPARATION

① コミュニカティブな Output を位置づけた年間指導計画の作成（完了）
② 地域外国語活動補助教材「Joy! Joy! English!」の制作…AEEN と共同研究
③ 指導方法の共有化…第 2 言語指導方法【B-SLIM】の導入・実践
（平成 20 年度より共同実践開始）

実践（DO）Ⅰ
① 北光小学校における実践
・豊かなコミュニケーション活動に視点を当てた外国語活動の実践
・コミュニカティブな Output を位置づけた外国語活動の実践
・B-SLIM に基づきスモールステップで構成し Output につなぐ外国語活動の実践

実践（DO）Ⅱ
② AEEN 会員による実践
・新たに制作した 4 題材を含めた授業実践（4 名）
…「実践のまとめ・課題・改善点」の提供

実践（DO）Ⅲ
③ AEEN における制作活動
・「Joy! Joy! English!」4 題材の制作
・「活用の手引き」の作成
・外部研究協力者による監修

評価 A
（＝ ASSESSMENT）
① 9 月：B-SLIM の考案者である Olenka Bilash 博士による評価（於 北海道立教育研究所）
② 10 月：第 4 回「Let's Enjoy English!」（旭川市）実践Ⅰ～Ⅲの発表，その後の話し合いにおける評価

実践のサイクル化
① ホームページより発信した「Joy! Joy! English!」をもとに，実践をしていただき，成果や課題を集約（12 名に研究協力を依頼済み）

評価 B
（＝ ASSESSMENT）
① 北光小学校研究部・AEEN 研究部における改善点を中心とした評価
② 筆者（小山）の視点に基づく研究の全体評価

再構築・再実践（RE-PLAN・RE-DO）
① 研究の再構築・実践計画

（平成 21 年 12 月作成）

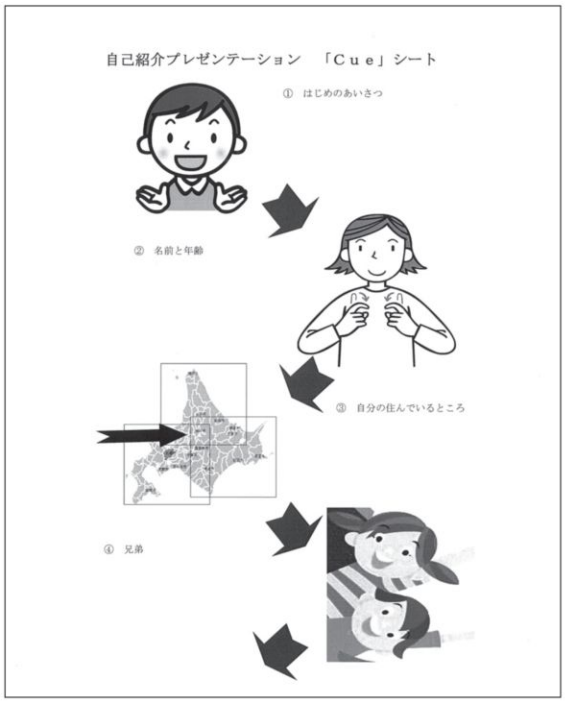
▶ 図 1：研究計画

3 具体的な Output の取り組み

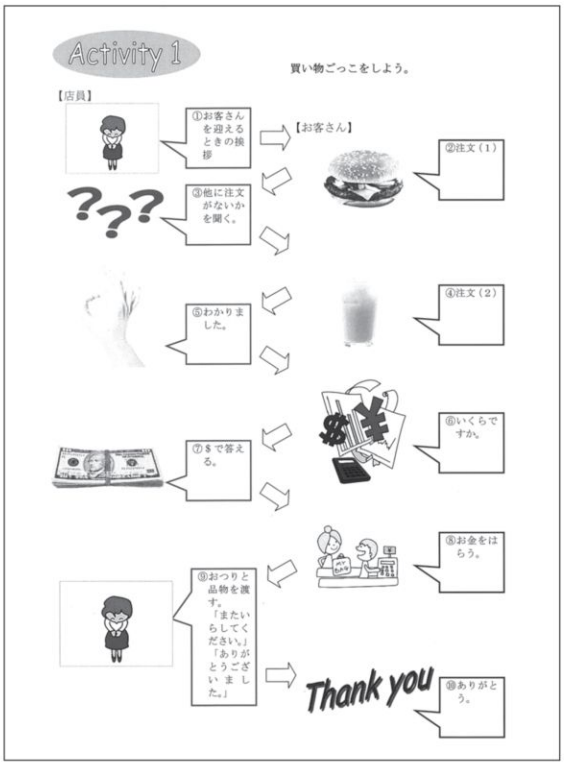
3.1 Output 的な活動

「英語ノート」導入以前は，指導計画を時間的なゆとりを持って構成することができ，Output に向けた準備（練習）などに充当することができた。しかし現在は，各 Lesson の前半（1・2 時間目）は，英語ノートを中心に使用しながら，その指導を B-SLIM で行い（Input から Intake の Getting it ステージまで），後半（3・4 時間目）は，自ら開発した教材をもとに Intake の Using it ステージに十分時間を費やし，Output 的な活動につなぐことを意識した外国語活動を行っている。

Output 的な活動とは，先に示した Output の要素のすべてを取り込むことはできないものの，可能な限り Output に近づけた活動を意味している。そこで，題材や言語材料などに合わせ，以下 3 点を



▶ 図 2：自己表現活動（自己紹介）Picture Cue テンプレート



▶ 図 3：Pair Work 用 Picture Cue テンプレート

Output 的な活動として実践した。

(1)	自己表現活動	（図 2 参照）
(2)	プレゼンテーション活動	
(3)	Pair Work による模擬交流活動	（図 3 参照）

(1)〜(3)については，Picture Cue を多く活用し，中でも(3)については，場の設定に配慮しながら実践した。

また，単元の終わりに位置づけた Output 的な活動の他にも以下の取り組みを実践してきた。

(1)	英語活動の日常化（実践例 1）
(2)	双方向の国際交流活動 （実践例 2：出向く活動・実践例 3：迎える活動）

3.2　英語活動の日常化

言語材料と学校生活を結びつけ，毎日の学校生活のさまざまな場面で英語を使うこができるように構成している。児童は，学校生活の中で毎日繰り返し使うことで，無理なく英語を身につけることができるようになってきた。

英語ノート導入以降は，可能な限り内容的な関連を持たせることができるように配慮し取り組みを進めた。

□実践例 1

(1)「朝の健康観察を英語で！」

※ 英語ノートⅠとの関連…Lesson 2 を終えた段階から開始

◇ 取り上げた言語材料の一例

— How are you today? I'm fine. I have a cough (fever, headache, stomachache, sore throat, runny nose) など

(2)「学習のはじめのあいさつを英語で！」

※英語ノートⅠとの関連…Lesson 8 を終えた段階から開始

◇ 取り上げた言語材料の一例

— Now start (finish) the lesson. Japanese, math, music, art and craft など

(3)「給食のチェックを英語で！」

※ 英語ノートⅠとの関連…Lesson 9 を終えた段階から開始

◇ 取り上げた言語材料の一例

— Do you have (a)〜? bread, milk, rice, soup, chopstics, spoon, fruits など

3.3　双方向の交流活動

どの場面でどのような表現を使うことができるのかを明確にして活動を展開している。さらに，既習内容を加味しながら「出向く交流活動」と「迎える交流活動」を積極的に進めた。その場に生かすことのできる表現や児童が交流のために必要と感じている表現を（児童のニーズも踏まえて）取り込んだ外国語活動を推進した。

□実践例 2「出向く交流活動」

○「フレンドシップパーティーに参加しよう」（H20.7）

自分たちの課題を解決することの他に，学校にゲストティーチャーとして来てくれる方を探すことも目的の 1 つとして，旭川市国際交流委員会主催の上記のパーティーに参加することにした。

土曜日開催であったため，学級児童全員が参加することはできなかったが，半数以上の児童が参加し，旭川市在住の外国人の方々との英語による交流を楽しんだ。ゲストティーチャーとして来校を要請する表現や自分たちが現在どのような学習を進めているのかを説明する表現をこの単元で学んだ。

（単元の展開例　図 4 参照）

本単元も，「英語ノート」との関連に配慮し，以下の単元を横断した総合的な Output と位置づけて構成した。

※ 英語ノートⅠとの関連…Lesson 5「いろいろな国の衣装を知ろう」・Lesson 6「外来語を知ろう」

※ 英語ノートⅡとの関連…Lesson 6「行ってみたい国を紹介しよう」

◇ 取り上げた言語材料の一例

— Will (Would) you come to ～?
　I would like you to ～.
　I'm studying about ～.
　I would like to know (listen, see) ～.

□実践例 3「迎える交流活動」

勤務校では，B-SLIM の創案者である O. Bilash 博士の学校訪問（H19より毎年 1 回来校）や外国人小中学生の体験入学，姉妹都市からの中学生訪問団などを積極的に受け入れ Output の場として活用してきた。

○「姉妹都市ブルーミントン・ノーマル市の中学生と楽しく交流しよう」（H21.7）

勤務校では，4 学年の総合的な学習の時間で，姉妹都市や友好都市の暮らしや文化などについて学習をしている。お互いの文化について学習した内容をもとに，交流の内容を決め準備を進めた。

交流のテーマは，「旭川について紹介しよう」とした。

すでに，英語ノートなどで学習した「道案内」を土台にして，観光名所や公共施設を案内するという内容で，外国語活動を構成した。実際の活動では，14か所の施設や観光地などの他，道案内の仕方，行き先がわからなくて困っている人への声のかけ方などについても学習を深めた。

◇ 取り上げた言語材料の一例

— city hall, art museum, library, bank, etc.
　May I help you?
　Where do you want to go?
　go straight, go back, turn right, turn left etc.

〔単元名〕『フレンドシップパーティーに参加しよう』(8時間扱い)

【単元の計画を立てる段階で児童のニーズを集約する】
○ 昨年は総合的な学習の時間に姉妹都市について学習したので，今年はもっといろいろな国のことについて調べたいな。英語を使って交流したいね。昨年の姉妹都市の中学生との交流で少しは英語を使うことができたよ。

↓

【単元のねらいとグループ（個人）課題の設定】
○ フレンドシップパーティーにみんなで参加することにしよう。学級全体のねらいは，① 英語で交流する（内容は，自己紹介・相手の国のことについて聞く・日本の印象を聞くなど），② ゲストティーチャーとして学校に来てもらうよう交渉する。ねらいを達成するためにしなければならないことは？

↓

【英語の表現や言語材料を洗い出し，調べ学習をする】
○ 自己紹介の仕方を復習しよう。旭川市の印象を聞く表現は何かな。どこの国から来たのかも聞いてみたい。昨年，外国語学習でやった外国のあいさつや文化などをもう一度振り返ってみよう。学校にゲストティーチャーとして来てもらうように頼むときの言い方は？

↓

【外国語活動】
○ 児童のニーズに基づいて外国語活動を行う
Hello. I'm a 6th grader of Hokkou Elementary.
What country are you from?
We are now studying about ... Could you teach me ...
Would you come to our school to talk about ... など

↓

【フレンドシップパーティー参加】
○ ねらいや自己課題に基づき参加した外国の方々と交流をする…交流活動（第 1 次）Would you come to our school to talk about ... など

↓

【学習の発展】
○ アメリカの人がゲストティーチャーで来てくれることになったよ。
○ どういう交流会にしようか。こんなことを聞きたいね。今まで調べたことを伝えてあげたいね。

【課題の追求…フレンドシップパーティーに関すること以外の課題の追求】
課題別ワークスチームでの追求
① 計画
② 調査活動・調べ学習・現地訪問など
③ 課題のまとめ
④ 発表会・交流会など

↓

【ゲストティーチャーを迎えて交流会をしよう】
交流活動（第 2 次）

↓

【単元を通しての反省・新たな課題】

▶ 図 4：具体的な単元の構成と展開例

3.4　取り組み（児童の自己評価）の結果

平成20～21年の授業後の児童の自己評価をまとめてみると次のような結果となった（表 1 参照）。

児童自己評価の他，単元末に同様の調査を合計11回（「Output 的な活動」を実施＝英語ノート使用～6 回，「Output」を実施＝英語ノート未使用～ 5 回）の結果をもとにして考察を加えることとした。

それをまとめると以下のようになった（表 2 参照）。

■表 1：授業後の児童の自己評価

A　強くそう思う	B　そう思う	C　あまりそうは思わない	D　全くそうは思わない

【児童の自己評価から】～①②③⑦⑧ は 4 回（時間）分の平均。④⑤は 6 回（時間）分の平均

①Output 的な活動に関する児童自己評価Ⅰ
（英語ノートによる Output 的な活動）
☆ Lesson 4 ～ Interview Game を実施（H20.8）

（%）

	A	B	C	D
積極的に取り組むことができた	76	18	6	0
楽しく取り組むことができた	82	12	6	0
取り組みに満足している	60	22	18	0

② Output 的な活動に関する児童自己評価Ⅱ
（英語ノートによる Output 的な活動）
☆ Lesson 5 ～ Pair Work によるプレゼンテーションを実施（H20.9）

（%）

	A	B	C	D
積極的に取り組むことができた	76	12	12	0
楽しく取り組むことができた	70	24	6	0
取り組みに満足している	56	28	16	0

③ Output 的な活動に関する児童自己評価Ⅲ
（自己表現活動＝ Picture Cue を用いた Output 的な活動）（H20.4）

（%）

	A	B	C	D
積極的に取り組むことができた	84	16	0	0
楽しく取り組むことができた	78	22	0	0
取り組みに満足している	92	8	0	0

④ 交流活動を通しての Output に関する児童自己評価Ⅳ
（『フレンドシップパーティーに参加しよう』H20.6）

（%）

	A	B	C	D
積極的に取り組むことができた	88	12	0	0
楽しく取り組むことができた	94	6	0	0
取り組みに満足している	94	6	0	0

⑤ 交流活動を通しての Output に関する児童自己評価Ⅴ
（『姉妹都市ブルーミントン・ノーマル市の中学生と交流をしよう』　H19.7）

（%）

	A	B	C	D
積極的に取り組むことができた	82	18	0	0
楽しく取り組むことができた	96	4	0	0
取り組みに満足している	94	4	0	0

⑥ 英語活動の日常化に関する自己評価Ⅵ
（⑧と同日に実施）（H20.11）

（%）

	A	B	C	D
積極的に取り組むことができた	70	24	6	0
楽しく取り組むことができた	76	18	6	0
取り組みに満足している	60	24	16	0

⑦ Output 的な活動を位置づけずに単元を終えた単元に関する自己評価Ⅶ
（英語ノート 2 Lesson 3　H20.5）

（%）

	A	B	C	D
積極的に取り組むことができた	68	16	16	0
楽しく取り組むことができた	68	24	8	0
取り組みに満足している	60	16	24	0

⑧ Output 的な活動を位置づけずに単元を終えた単元に関する自己評価Ⅷ
（英語ノート 2 Lesson 7　H20.11）

（%）

	A	B	C	D
積極的に取り組むことができた	70	24	6	0
楽しく取り組むことができた	76	18	6	0
取り組みに満足している	60	20	20	0

○質問内容の全文　（調査対象＝旭川市立北光小学校 5・6 年）
【積極的に取り組むことができた】～あなたは活動を進めるときに，自分から進んで取り組むことができましたか
【楽しく取り組むことができた】～あなたは友達（や ALT）とかかわりながら，楽しく活動に取り組むことができましたか
【取り組みに満足している】～あなたは言いたいことを伝えたり，伝えられたりする活動に満足できましたか

■表2：単元の最終の活動後に行った自己評価のまとめ（数値は%）

		A	B	C	D
①単元を通して，友達や ALT とのかかわりや Activity に積極的に取り組むことができた	英語ノート使用時	76	12	12	0
	英語ノート未使用時	82	12	6	0
②単元を通して友達とのかかわりや Activity に楽しく取り組むことができた	英語ノート使用時	76	18	6	0
	英語ノート未使用時	82	18	0	0
③本日の活動まで見通しを持った取り組みを進めることで何をすればよいかがわかり意欲が高まった	英語ノート使用時	76	18	6	0
	英語ノート未使用時	76	24	0	0
④練習してきた表現で，言いたいことを伝え合う取り組みは満足感につながった	英語ノート使用時	64	18	18	0
	英語ノート未使用時	76	24	0	0

（注）単元の最終の活動後の自己評価は，7 項目であるが，本研究に直接関係しない 3 項目は割愛。

3.5 Output もしくは Output 的な活動に関する考察（成果と課題も踏まえて）

先の結果から，以下の 3 点を考察することができる。

1. 英語ノートの使用のいかんにかかわらず，単元構成を行う際に，Output もしくは Output 的な活動を位置づけることによって，90%以上の児童が活動に意欲的に取り組むことがわかった。さらに，単元の終わりにどのような Output（もしくは Output 的な活動）を行うのかという期待感や見通しが，活動意欲を持続させることがわかった。その過程において，「伝えることができた。相手の伝えようとしていることがわかった」という喜びが，児童の達成感や満足感につながっていることも同時に確認することができた。【表 1 および表 2 ①③④より】
   本研究に着手する際に仮説として想定していた「Output の充実が児童の活動意欲を高める」ということを検証できる一定の成果を持つことができた。
2. 英語ノートを使用せずに単元を構成し，Output として活動を行ったときには，楽しさや意欲的な取り組みの割合は変わらないものの，活動後の「満足度や達成感」では，若干の違いが出た。Output としてのダイナミックさやバリエーションの広さが大きな理由と考えられる。【表 1 および表 2 ②④より】
3. 英語の日常化については，高学年になるとどうしてもマンネリ化に陥りやすい。繰り返すことにより，確実に身についてきてはいるが，毎日同じ状況で実施するよりも，実施時期を集中して行うことや曜日を決めて英語に取り組むなど，もう少し方策や取り組みの工夫が必要であると思われる。【表 1 ⑥より】

Output もしくは Output 的な活動について，筆者が学級担任をしていた児童（32名）および学年の児童（65名）の自己評価をもとに考察を加えた。

しかし，さらに資料としての価値を高めるためには，(1) 自己評価項目の質問内容の吟味，(2) 他の学校の児童による同様の自己評価分析を広く行うこと，(3) Output 的な活動のどういった内容（観点）が，児童の内面（意欲や満足感など）に働きかけているのかを細分化して調査することの 3 点が必要である。

4 「Joy! Joy! English!」の制作と実践例

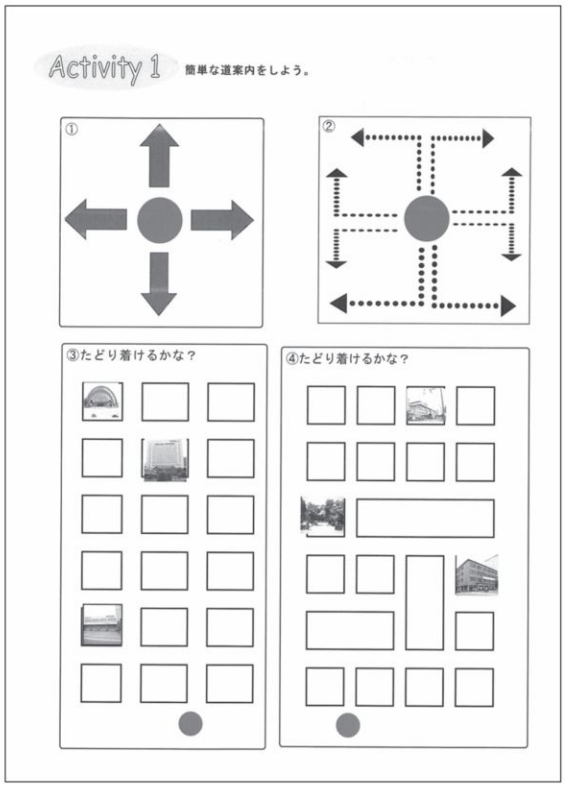
4.1 地域教材の意義

数多くの教材開発を手がけ，実際に英語（外国語）活動で使用してきた。活動後の自己評価を総合してみると，児童の活動意欲を喚起する教材には，5 つの視点を見いだすことができた。

（視点 1）児童自身が自分で作成した教材
（視点 2）ICT に関連する教材
（視点 3）勝ち負けや順位を競うことのできる教材
（視点 4）地域や自分の身近なことに関連する教材
（視点 5）自分の使う表現を選択したり，自由に組み合わせすることのできる教材
（※AEEN 会員34名の記述式アンケートより　H20.6）

そこで，「視点 4」に着目し，英語ノートを補完し，豊かなコミュニケーション活動を実現するための地域教材として，「Joy! Joy! English!」を企画し，編集に着手した（図 5・図 6 参照：Lesson 5 テンプ

▶ 図 5：Lesson 5　道案内テンプレート



▶ 図 6：道案内ワークシート

（注）WEB（http://www.aeen.jp/）より発信されている「Joy! Joy! English!」の一部

レートとワークシート）。

さらに，これを共同実践し，外国語活動を進めるにあたり，地域教材の使用が児童の活動意欲を高めることにつながるかどうかを検証していくこととした。

例えば，「道案内」にしても，一般的なマップを用いて活動するよりは，自分の居住する自宅や学校などの周辺を素材にした活動の方がより高い関心を示し，活動意欲の向上につながるのではないかと考えた。

制作にあたって，基本的な方針は，次の 3 点である。

(1) 児童が身近に感じられる地域素材を用いた内容
(2) コミュニケーション活動を促進させる内容
(3) 文字を最小限にし，ビジュアルに訴える内容

また，現在の段階における「Joy! Joy! English!」の制作状況は，以下のとおりである（表 3 参照）。

■ 表 3：「Joy! Joy! English!」制作状況（平成 23 年 4 月 1 日現在）

		L1	L2	L3	L4	L5	L6	L7	L8	L9
英語N1	制作完了	◎			◎	◎		◎	◎	◎
	制作中			○						
	HP よりアップ				◎	◎		◎	◎	◎
英語N2	制作完了		◎	◎		◎				◎
	制作中						○		△	
	HP よりアップ			◎		◎				◎

（注）◎：完成　○：原稿完成　△：着手開始
HP は http://www.aeen.jp/

4.2 「Joy! Joy! English!」の広がりを求めて

制作後は，AEEN ホームページより発信し，多くの方々に使用していただくことを考えた。さらに，使いやすさを提供したいと考え，レッスンの各ページごとに「活用マニュアル」を作成し，具体的な活用方法の一例を示した。

教材としての「Joy! Joy! English!」の使用が広がっていくと同時に，多くの方々から使用後のご意

見や感想，さらには改善点の指摘や有効な活用方法などを寄せていただき，改訂を重ねながら質の高い「Joy! Joy! English!」にしていきたいと考えている。

4.3　共同実践

平成22年９月から，「Joy! Joy! English!」が Output もしくは Output 的な活動で，有効な教材となり得るかどうかを検証するために，12人の教諭（AEEN 会員）に共同実践を依頼し，その結果を考察・分析してみることとした。

考察・分析は，児童の自己評価をもとにすることとし，同時に，使用した先生方に対してもアンケート形式で意見を求め，改善の視点を見いだしていきたいと考えた。

共同研究の進め方は図７のとおりである。

4.3.1　共同実践の具体例（北見市谷口麻衣教諭による実践）

1. 単元計画（5時間）

1	・ 北見市にある建物の言い方を知ろう(1) ① Input ... Using Picture Cards・Using Chants ② Intake ... Card game・Touch the base
2	・ 北見市にある建物の言い方を知ろう(2)
3	・ 方向や動きを指示する表現を知ろう Activity 1—① ②
4	・ 道案内をしよう(1)　～地図を使って道案内をする～　Activity 2
5	・ 道案内をしよう(2)　～教室を街にしよう～ Output 的な活動

○ Output 的な活動場面を設定
○ 「Joy! Joy! English」を活用した実践

⇩

【実践協力者】
① 津田絵里　（名寄市立名寄南小）
② 井谷泰成　（旭川市立東町小）
③ 佐藤直子　（旭川市立啓明小）
④ 川﨑理恵　（紋別市立渚滑小）
⑤ 河野登貴子（旭川市立向陵小）
⑥ 森田由香　（旭川市立北鎮小）
⑦ 渡辺恭平　（中富良野町立旭中小）
⑧ 辻野尚広　（東川町立東川第三小）
⑨ 中原慎也　（旭川市立北光小）
⑩ 北川朋尚　（旭川市立北光小）
⑪ 高田秀人　（旭川市立日章小）
⑫ 谷口麻衣　（北見市立小泉小）

【実践内容】

【仮説】
○ 地域教材を使うことで外国語活動に対する活動意欲が高まる
○ 「Joy! Joy! English!」で Output 的な活動が充実する

【実践の内容】
① 各学校の地域の実態に応じて「Joy! Joy! English!」を編集し，地域教材としての性格を持たせる
② 各自４時間扱いで行うときには，最終の時間に実施し，Output 的な活動を構成する
③ 授業記録として残す（特に Output のところは詳細に）
④ 授業後，児童に自己評価用紙（アンケート）に記入させる
⑤ 所属学校の先生方に働きかけ，実践していただく

【分析・考察】
□ 地域教材の意義
□ 児童の関心・意欲の高まりと地域教材
□ 自己評価のまとめ

⇩

１月末までに，【分析・考察の結果および指導記録】をデータで小山（旭川市立北光小学校）あてに送付する

▶ 図７：共同研究の進め方

2. 本単元で取り上げる新言語材料

(1) 場所を表す言語材料

① Kitami Station（北見駅）
② Kitami City Office（北見市役所）
③ Kitami Central Post Office（北見中央郵便局）
④ Kitami Parabo（北見パラボ）
⑤ Kitami City Museum（北見市芸術文化ホール）
⑥ Kitami City Hall（北見市民会館）
⑦ Kitami Central Police Station（北見中央警察署）
⑧ Pierson Memorial Museum（ピアソン記念館）
⑨ Kitami City Library（北見市図書館）

(2) 方向を示す言語材料

① Go straight　② Go back　③ Turn right (left)
④ Stop

3. 5 時間目の活動の流れ（Output 的な活動）

(1) 本時の内容

〇道案内をしよう(2) ～教室を街にしよう～

(2) 本時で取り上げる新言語材料

Where is the ～?「～はどこにありますか」
☆その他に使用する表現は前時までに既習済みの内容（建物・方向や動きを指示する表現など）

(3) 活動の流れ

① Warm up
・建物の名前を言ってみよう（Chants）

② Input
・Where is the ～? を建物の名前と合わせて

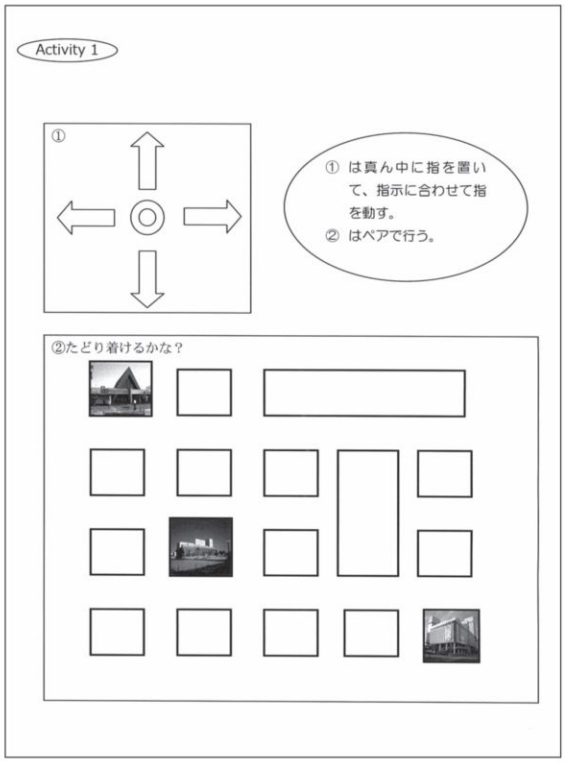
③ Intake（Pair Activity 1）
・教室内に北見市内の建物の写真を掲示し，道案内をする。
・1 人は Where is the ～? と場所を尋ね，もう 1 人はその場所にたどり着くように道案内をする。

④ Intake（Pair Activity 2）
・通行止めを 3 か所作り，繰り返して互いに道案内をする。

⑤ Class Activity
・ALT の先生に道案内をする

4. 使用教材「Joy! Joy! English!」（北見版）（図 8・図 9 参照）

▶ 図 8：道案内のテンプレート（北見市版）



▶ 図 9：道案内のワークシート（北見市版）

（注）制作者：谷口麻衣（北見市立小泉小）

活動の 1 時間目に「北見市を英語で案内できるようになりたくありませんか」と投げかけると，「誰に？　ALT の先生に？」や「案内できるようになりたい」，「英語を使ってみたい」という質問や反応があり，意欲的な姿勢が児童から伝わってきた。地域教材を用いた外国語活動の最初の段階で，手応えを感じることができた。

活動が進むと，初めのうちは，建物の名前を覚えることに苦労していた児童も多く見られたが，チャンツやカードゲームなどを通して身についてくると，他の建物の表現の仕方（病院・兄弟が通う高校など）についても興味を持つようになり，児童の関心の高まりを実感できた。

また，5 時間目（Output 的な活動）では単元のまとめとして学級を北見市内に見立てて道案内を行った。Pair Activity の後に，Class Activity として全員で ALT の先生に道案内をした。

その中で，児童同士で相談しながら近道になるように考えるなど，住んでいるからこそこだわりたい部分なのか，実際の道を思い浮かべながら道案内しようとする姿が見られた。

ただ今回の活動で大きく違ったのは，「楽しかった」で終わるのではなく，「実際に道案内をしてみたい」という声が児童から生じ，自然な流れの中で Output 的な活動につながったというところである。

自分の住んでいる地域についてだからこそなのか，地域教材の強さを感じずにはいられない結果となった。

【実践報告および考察　谷口麻衣（北見市立小泉小）（北見市）】

4.3.2　共同実践の報告から

他の先生方からも，同様の実践報告が多く寄せられた。「道案内」（英語ノート 2 Lesson 5）を選択した先生方が多かったのは（12名中 7 名），地域性を強く打ち出すことのできる題材であることが理由であると考えられる。

道案内の Output 的な活動として，地域在住の外国人の方を招き，交流活動の一環として外国語活動を行った実践例や参観日を利用して，体育館に模擬マップを作り保護者に道案内を行った実践例などの報告もあった。

また，「買い物」（英語ノート 1 Lesson 5）を選択された先生方が次に多く（12名中 3 名），地域のスーパーマーケットと同じ配列のテンプレートを作成したり，道案内と「買い物」を組み合わせたりしながら，創意工夫に満ちた実践を展開していた。

4.3.3　共同実践後のアンケートから（教師アンケート）

12名の先生方に対して，実践後に下記の簡単なアンケートを行った。結果は表 4 のとおりである。

【教師・児童共通アンケート】

1	外国語活動（英語活動）をするときに，身近にあるものを使ったり，身近にあることをもとに学習することで，楽しさややる気が増す。	A　B　C　D
2	ALT や友達と一緒にゲームをしたり，話をしたりすることが楽しく感じられる。	A　B　C　D
3	外国語活動のときに行う勝ち負けや順位のはっきりとした「アクティビティ」や「ゲーム」が好きである。	A　B　C　D
4	外国語活動をするときに，「英語ノート」を使うとわかりやすいので良いと思う。	A　B　C　D

A：強くそう思う　B：そう思う　C：あまりそうは思わない　D：全くそうは思わない

4.3.4　共同実践後のアンケートから（児童アンケート）

授業後に，児童アンケートも行った。今回は，教師アンケートと同内容で行った（結果は表 5 参照）。

■表 4：教師アンケート結果

① アンケート集計結果＝教師…数字は実数【人】

設問	A	B	C	D
1	10	1	1	0
2	9	2	1	0
3	11	1	0	0
4	5	3	4	0

② 実践後の質問に対する回答…数字は実数【人】

	A	B	C	D
Output もしくは Output 的な活動の充実は児童の活動意欲を高めるか？	11	1	0	0
地域教材（Joy! Joy! English!）は，Output 的な活動に有効であるか？	9	2	1	0

地域教材の効用と英語ノートに対する感想を尋ねることに主眼を置いたため，できる限り簡潔に終えることができる内容にした。

■表 5：児童アンケート

児童アンケート集計結果＝児童…数字は（%）

設問	A	B	C	D
1	80%	16%	4%	0%
2	64%	22%	8%	6%
3	76%	14%	8%	2%
4	68%	18%	14%	0%

（回答数＝ 9 校 184 名）

4.4 「Joy! Joy! English!」共同実践の考察（成果と課題も踏まえて）

依頼した先生方から，かけがえのない実践報告を多数いただいた。まだまだ改善の余地はあるものの地域教材が，児童の活動意欲を高めるという報告を筆者の勤務する学校以外の実践でも目にすることができた。

- 今回初めて「英語ノート」を離れて実践してみました。上手に使いこなせなかったものの「構成と Output 的な活動の大切さ」を感じることができました。他の単元でも使ってみます。（T 教諭）
- 今回の実践で，児童の興味・関心を高める教材開発を行い使用することで，活動意欲を持続させたり，高めたりできることを学びました。（K 教諭）

一方，先生方へのアンケートの中に克服しなければならない貴重な指摘もあった。

- 作成（画像などの変換や編集）に思いのほか時間がかかる。時間をかけずに教材化できるとよい。
- 「活用マニュアル」があることで使っていく見通しが立つものの，内容が少し高度すぎないか検討を要する。（同意見 3 名）
- 道案内や買い物など「地域教材」として有効な題材とあえて「地域教材」としなくても英語ノートなどで構成を工夫すれば十分と思われる題材がある。
- 地域教材の良さは今回十分わかったが，それ以外の視点に基づいた Output 的な活動に生かすことのできる教材開発に期待する。

これらを十分に踏まえて，今後改善の方策を練り上げ，多くの方々に活用いただける教材として創り上げていきたい。地域教材「Joy! Joy! English!」が Output 的な活動に有効であることと同時に，児童の活動意欲を高めていくことを検証することができた。

5 終わりに

成果と課題

実践の中で感じてきた「違和感」からスタートし，児童の自己評価をもとに Output もしくは Output 的な活動の在り方を見つめることのできた研究であった。

2 つの仮説を検証していく段階で，当初の見通しに沿った形で成果と課題を示すことができた。下記を参照していただきたい。

3.5 Output もしくは Output 的な活動に関する考察
4.4 「Joy! Joy! English!」共同実践の考察

しかし，今回協力いただいた先生方は，外国語（英語）教育に関しては，数年前より AEEN で学び続けてきた研究同人である。外国語活動そのものの素地のない学校で実践したときにこのような結果になるかどうかは未知数である。

最後に，Olenka Bilash 博士から，B-SLIM と英語ノート，「Joy! Joy! English!」（地域教材）の関連について指導をいただいた。その中で，『B-SLIM という指導方法は，英語ノート・地域教材など，どのような教材であっても有効に生かすことのできる指導方法である。なかでも「Joy! Joy! English!」（地域教材）は，単に Output あるいは Output 的な活動にふさわしいというだけではなく，児童にとっては，英語を通して「地域を学ぶ，地域を知る，地域を好きになる」という側面も持ち合わせている。実践を多く積み上げ，それをもとに質の高い教材として改善を加えることが大切である』という評価をいただいた。

さらに，『外国語を学ぶにあたって最も大切にすべきことは，児童の Motivation（意欲）を高めることであり，それをかき立てる「教材開発力」と「充実した Output につなぐ活動構成力」が教師に不可欠である』との助言をいただいた。

謝　辞

最後に，本研究に協力いただいた方々に感謝を申し上げる。特に研究の細部にわたりご指導・ご助言をいただいた大友賢二先生，2度にわたり本校を訪問し適切な助言をいただいた Olenka Bilash 博士，共同実践やアンケーでお世話になった AEEN の先生方には，心よりお礼を申し上げる。

参考文献

AEEN（旭川英語教育ネットワーク）(2010).『第 4 回小学校外国語活動研修会 Let's Enjoy English』資料集. 北海道：AEEN.

樋口忠彦.(2003).『児童が生き生き動く英語活動の進め方』. 東京：教育出版.

樋口忠彦.(2005).『これからの小学校英語教育―理論と実践―』. 東京：研究社.

北海道立教育研究所.(2003).『「総合的な学習の時間」における小学校英語活動の手引き・ハローイングリッシュ』. 北海道：北海道立教育研究所.

植松茂男.(2003).『第二言語習得理論の児童英語教育への示唆』. 大阪：日本児童英語教育学会第24回全国大会資料集.